

Sir Alan Gardiner の *The Theory of Proper Names* と認知意味論

山 本 和 之

1. はじめに

エジプト学で著名な Sir Alan Gardiner (以下 G と略す) が小冊子 *The Theory of Proper Names: A Controversial Essay* (以下『固有名論』) をオックスフォード大学出版局から世に問うたのは、1940 年 60 歳の時であった。あまり注目されないままに第二版を刊行したのはそれから 14 年後であった。第二版では、その間に出た書評のうち、ウルマンの批判に応じて、自分の定義に若干の変更を加えた「回顧 1953」が追加されている。この本の初版、第二版が出た 1940 年、1954 年とえば、まだアメリカ構造主義言語学が全盛期の頃で、その 3 年後の 1957 年にチョムスキーの『統語構造』が出版され、アメリカの言語学は大きな転換を迎えることとなる。私が大学を出て大学院に入ったのが 1958 年で、まだ構造言語学が主流ではあったが、変形文法 (当時はこの呼称が一般的であった) も読まれ始めていた。勿論イエスペルセンなど、いわゆる伝統文法も学部で教わっていたので、3 種類の文法をおそらく消化不良のまま飲み込んでいたことになる。

私が恩師の一人に言われて『固有名論』をはじめて読んだのはちょうどこのような時期であった。実際のところ、当時の学問的状况からしても、また私の個人的関心からしても、強く興味を引くような本ではなく、読んでも固有名に関する議論そのものにはあまり強い印象は受けなかった。それを今回持ち出したのには理由がある。

認知言語学は 1980 年代あたりからひとつの流れを形成してきた新しい理論体系であり、言語を自律的な体系と見なすチョムスキー等の考え方と大きな対立をなす。しかし、認知言語学的なというか、認知言語学に似た考え方は、それまでにまったくなかったわけではない。勿論、部分的に認知言語学的と一致する見方があるからといって、あるいはその萌芽があるからといって、体系化された学問である認知言語学と関連づけるのは見当違いのそしりを免れないであろう。それは承知の上で、それでもなお私には、G が『固有名論』の中で述べていることに認知言語学的な発想が読みとれることがずっと気になっていたのである。はじめて読んだときにはさほど気にもとめなかったことが、認知言語学に接してあらためて私の意識にのぼってきたのである。そこで、『固有名論』で述べられている G の考え方を、一度認知言語学的な枠に照らして提示してお

きたいのである。したがって今回の小論の目的は、Gの固有名の定義そのものを検討することではなく、Gが人間の認知能力と範疇(化)に対してどのような見方をしていたかを考察することである。なお、Gの言語理論そのものについては、かれの *The Theory of Speech and Language* (OUP: 研究社英語学ライブラリー 13『Speech と Language』は第二版(1951)の訳述(要約))を参照していただきたい。『固有名論』においても、かれの言う意味での Language と Speech の区別がなされ、Language を対象とした分析が行われている。

なお、すでにお気づきのように、この小論では、Proper Names の訳を固有名とした。固有名詞の方が日本語では一般的呼称であろうが、それでは Proper Nouns の訳ととられる恐れがあるので、いささか生硬ではあるが固有名を用いることとした。

2. Construal

Gは、認知意味論で使われている *construe* という語は使っていないが、言語には人間の心が対象物をどのように捉えているかが反映されていると考えていた。そのことが明確に示されている箇所を『固有名論』から引用しておく。以下頁数は第二版の頁数である。

Just as a noun is not merely a word that denotes a thing, but is one that views a thing as a thing, so too a proper name is a word that *is recognized* as identifying its object by virtue of the distinctive sound exclusively. (67頁: イタリックスは原文)

同様の趣旨のことを、Brøndal の『語類』(*Ordklasserne*)を批判しているところ(70頁)で述べている。すなわち、ブレンダルの語類体系は対象物の論理的性質に全面的に基づいているのに対して、私(G)は、語類が対象物の性質に少なからず依存しているとは思いますが、これらの対象物を人間が見るその見方を私は重要視している (*attach great importance to the way in which human beings ... look upon the said entities*)。たとえば、名詞とは(人間が)事物と見なした事物を指す語である。この点で自分はブレンダルとはっきりと一線を画していると述べている。

Gは『Speech と Language』の中でも (§42)、同じ雨が降っている状況も人間の心を通ると、*Look how it rains.* のように動作としても、*Look at the rain.* のように事物としても提示され、対象は心によって制御されていると述べている(下線は現筆者)。話者は対象を自分なりの捉え方で捉え、それをそれに対応する言語の形に載せて聴者に与えているのである。聴者に対象をこんなふうに見てもらいというその言い方で発話しているのである。Gは、事物自体がどんなものかよりも、人間がその事物をどんなふうに見なしているかが言語に反映されていると考えていたのである。これは認知言語学の考え方と同じである。

3. カテゴリー化とカテゴリーの拡張

人間はさまざまな事物を自分達の生活に役立つようにグループ化し、新しい事物に遭遇したと

きにも、それを既存のどれかのカテゴリーに取り込んできた（カテゴリーの拡張）。目に見えないコトの世界も、目に見えるモノの世界になぞらえて（目に見える世界を拡張して）理解してきた。これは人間が持っている基本的な認知能力のひとつである。勿論まったく新しいカテゴリーを形成する能力も持っているが、カテゴリーを無限に増やすことは、脳に非効率的で過大な情報処理を強いることになる。

われわれは「松井」や「東京」が「木」や「台所」といった名詞とは異なることを、言語的直感として知っている。両者が違うグループ（カテゴリー）に属していると思っっているわけである。そこで、前者に固有名（固有名詞）、後者に一般名（普通名詞）というカテゴリー名を付けて區別してきた。新しい事例・対象に遭遇すれば、何らかの一般化を行い、どちらかのカテゴリーに取り込んで行く。一般化ができるには、異なる事物の間に類似性・近接性を認める能力が前提となっている。AがXというカテゴリーの成員（AがXの事例）であるとき、新しく遭遇したBにAとの類似性を感じとれば、われわれはBをAと同じXのカテゴリーとして取り込んでいく。このようなカテゴリー化は、＜プロトタイプに基づく拡張＞と呼ばれている認知プロセスである。なお、人間の認知プロセスはここで終わるわけではない。われわれは、新しく取り入れた事例とプロトタイプ事例から、プロトタイプ事例が属しているカテゴリーのスキーマを、より一般的なスキーマに変えていく（新しい事例にも適用できるようなより一般的なスキーマを抽出する）能力を持っている。Gの時代には、認知言語学で言うイメージ・スキーマのような概念はなかったので、Gに即して言えば、固有名とはどんなものか頭の中で描いているものが変わり、それに基づきカテゴリー（固有名）の定義が変わるということになる。つまりより一般的な定義を提案するということになる。

Gは、この、人間の心が持つ一般化の能力の表れである＜プロトタイプに基づく拡張＞を、連続的統一性の法則（Law of Serial Uniformity）という呼称で捉えている（29頁・48頁）。これは人間の心が持つ、現象間の違いを無視して現象を同化させる一般化の性向（能力）が表れたものと言う。Gは、単体しか指さないものの中にも固有名でないものがあるという議論のところで、strontium や helium など固有名とする人がいることに対して、gold や silver のような固有名でない元素名がすでにあるので、連続的統一性の法則が働く（したがって普通名詞として受け止める）と述べている（29頁）。また、「ナポレオン」のような人口に膾炙している人名が普通名詞として扱われない理由のひとつとして、連続的統一性の法則が働く、つまり、人はみんな名前を持っている、「ナポレオン」もあのコルシカ人の名前である、そうであれば、たとえ普通の人の名前より深い意味を持っていても、普通の人の名前と同じように、固有名と見なされると言う（48頁）。Gは、鳥の名前のところでも、高名なフランスの言語学者が、どの鳥のことだか分からないような鳥の名前は固有名だと主張したことに対して、連続的統一性の法則という用語は出していないが、この法則によって反論している（51頁）。すなわち、linnet や corncrake に遭

遇したとき、これらが鳥（の名称）であることを知っている人であれば誰でも、これらをすでに知っている鳥（の名称）sparrow や thrush と同じ範疇に入れるであろう（51 頁）、そしてこのsparrow や thrush が普通名詞であることは、文法的知識のある人なら、誰も疑わないであろう、と述べている。

4. Prototype と Gradience

認知言語学と従来の言語学とでは、カテゴリーに対する考え方が基本的に異なっている。古典的なカテゴリー論に基づく分析では、カテゴリー間は明確な境界で仕切られており、カテゴリーのメンバーはすべてそのカテゴリーの同等のメンバーであるという前提のもとに分析を行ってきたが、認知言語学では、カテゴリー間の境界は曖昧であり (fuzzy)、カテゴリーを構成するメンバーも、典型的なメンバー（プロトタイプ）から周辺のな（非典型的な）メンバーへと段階 (gradience) を形成していると考えている。

G は、カテゴリーを認知言語学と同じようにプロトタイプの的に考えており、固有名というカテゴリーは明確に区別された領域ではなく、多くの語によって得られた一種の卓越（した特徴）として考えるべきだとしている（29 頁）。固有名とするには疑わしい例があるのは、まさにそのことを示していると言う。

G は、ミル (J. S. Mill, *System of Logic*) が固有名を、事物を区別するために事物に付けられた無意味なしるしであるとしたのに対して、固有名である性質は絶対的なものではなく、固有名という用語は、語の持つ事物（対象物）を確認する (identify) する力、そしてその結果生じる対象物を区別する力がその語音だけに、ほとんどそれだけに依存していて、その語に属する意味にあまり依存してない語をひとつに纏めたものであると言う（66 頁・38 頁）。一般名 (general name)、つまり普通名詞はこれに対して語音よりも意味の方が勝っているのである。対象物を選び出す力が語音に依存しているか意味に依存しているかは、おおざっぱに言うと語音への依存が高くなれば意味への依存が低くなるという関係にあると思われるので、G とミルとは目のつけどころがそんなに違っているわけではないが、G は語音への依存を正面に置いた。G の捉え方で特徴をなすのは、そのことより、固有名のカテゴリーに属するメンバーを典型的なものから非典型的なものまで段階を構成するものとして捉えていることである。G にとって典型的な例とは、語音を持つ対象物を確認する力がもっとも純粋な（下線現筆者）かたちで表れる語である（38 頁）。語音の示差性は固有名だけでなく一般名（G では普通名詞と同義）についても言えることであるが、示差的音がそれで十分な対象物確認の手段であるか、それとも一般名のように、意味を考慮することによって助けられねばならないかでは、大きな違いがあるとして（39 頁）、固有名のうちもっとも純粋なものは、その音がまったく任意的でしかも完全に示差的 (distinctive) であって、もしその固有名が付いている人や場所を知らなければ、意味が全然感じられないもの、例え

ば、Vercingetorix や Popocatepetl のような語であるとしている (40 頁)。

固有名性に段階 (G は gradations という語を使っている) があるという考えは、人名のかわりをなす Father や Cook についても持ち出している。G は、Cook を固有名として採用された (adopted) 普通名詞として分類することを提案しており、Father はそれよりさらに固有名性が劣るとする (49 頁)。理由は、母親が子供の言い方を真似る場合を除けば、父子関係にある子供によってのみ用いられるからである。G はまた、月名と季節名についても、前者の方が固有名性が強いとしている (53 頁)。というのは、季節どうしの間の方が違いが大きいので、区別を示すのに、意味の果たす役割が月名の場合よりも大きい、逆に言えば、月名の場合の方が語音の果たす役割が季節名よりも大きいということになり、G の基準からすれば固有名性が高いということになるのである。

固有名の中には、Dartmouth や Mont Blanc のように、由来がそれと分かる (意味を持っている) ものがある。こういった語源の意味は、これらの固有名がどこ (何) を指すのか知らない人に、対象を確認 (identify) する上で助けを与えるかもしれないので、固有名の範疇例としてはいくらか純粋さが劣ると言う。同様に、Mary や Heinrich などは、性別や国籍を示唆することがあるので、固有名としての純粋さが劣ると言う (41 頁・42 頁)。

G は、鳥や植物のラテン語名 (例えば Brassica rapa) の方が対応する英語名 (turnip) よりも固有名性が高いとする (そのあとのところで正直なところ固有名であるかどうかの境界線上にあると言っているが)。その証拠に、ラテン語名の方は、This is a Brassica rapa. とは言えない (複数形も不可)。ラテン語名の方は、名前そのものが前面に出るのに対して、英語名の方は同種のはかの成員との類似性に訴えたとする (52 頁)。学名は名前自体 (語音) に重点があるのは確かであろう。G は、国籍名、種族・氏族名、苗字等の扱いでも固有名性に段階を取り入れている (25 頁) が、すでに段階性の例は十分にあげたと思うので省略する。なお、固有名は、G の言う Speech における臨時的用法を介して普通名詞へと転化する場合がある。a spa や a Lido はその途中の段階で、a guy や a robin になると、それがもともと指していたものとの指示関係はまったく消えてしまい普通名詞となっていると言う (13 頁・14 頁)。このような移行段階の判断は、英語の母国語話者でないと分からない。

カテゴリーが、典型的なメンバーから非典型的なメンバーまでいろいろな段階のものから構成されているとなれば、他の性質も兼ね具えた非典型的なメンバーはカテゴリーの境界を跨いで存在することになり、カテゴリー間の境界は当然のことながら曖昧 (fuzzy) になる。G がカテゴリー間の境界は入り組んでいる (重複している) と考えていたことは既に指摘した通りであるが、そのことが述べられている他の箇所をあげておく。

G は、固有名を「実体を具えた固有名」(embodied proper name) と「実体から分離された固有名」(disembodied proper name) に分解している。前者は、特定の实体と結びつけられている

場合の固有名であるのに対して、後者は、語源などのために研究される場合の固有名である。「メアリー」は特定の人を指している場合もあれば、実体とは分離されて単なる名前としても存在するのであるが、Gは、この二つの範疇も大きく重なっていることを認めねばならないとしている(9頁)。またGは、複数語から成る固有名を、Sutton Scotney や New Jersey のような複合固有名 (compound proper names) と Roger Bacon や Edgar Allan Poe のような合成固有名 (composite proper names) とに区別しているが(20頁)、そのことに関して、この二つのクラスは互いに相手側に入り込んでいて、言語範疇の境界がしばしば曖昧なものであることを示している、と本文の中で注記している(20頁)。

5. おわりに

カテゴリーに対して上述のような見方をとるとき、具体的な事例がどのカテゴリーに属しているかの判断は何に依存することになるのだろうか。Gにとってそれはその言語を使用している人達の言語感覚 (linguistic feeling) である。言語的直感と言ってもよい。Gは、言語学者の仕事は、われわれがすでに直感的に知っていることに対して妥当な知的根拠を見つけることだし(27頁)、もし言語使用者が持っているこの言語感覚(言語的直感)が客観的真実でないならば、文法家の仕事は意味のないもので、文法家の立てる区別もまったく人為的なものとなろうと言う(41頁)。Gにとって言語感覚とは、理想的な話者の言語感覚である。Gは言う、ある語がどの範疇に属するかは、その対象物とその対象物の指し方をもっともよく知っている人の言語感覚で決定されると(51頁)。固有名のカテゴリーは、言語使用者の心の中にある心理的実在なのである。以下参考まで、Gの固有名の定義(修正版)をあげておく。

A proper name is a word or group of words which is recognized as having identification as its specific purpose, and which achieves, or tends to achieve, that purpose by means of its distinctive sound alone, without regard to any meaning possessed by that sound from the start, or acquired by it through association with the object or objects thereby identified. (73頁)

最後に Ernst Pulgram (以下Pと略す)が *Word* 誌上で行った書評に触れておきたい (*Word* 11, 1955)。Pは、固有名にその純粋さにおいて段階がある、例えば語源的に意味が感じられるような固有名は純粋さが劣る、というようなGの考え方は受け入れられないとし、G自身、Spittal という地名はその地に病院がなくなってはじめて固有名になったのではなく、最初から固有名であると言っているのではないか、また Ironmonger が金物屋をはじめたら名前を失うなどというのは馬鹿げていると自分でも言っているのではないかと反論している。

Pの反論は、Gが固有名の純粋さに段階を設けたことと、言語使用において固有名として機能するかどうかとの関係を明示的に述べなかったことに起因する。固有名としての純粋さが劣るものは固有名として機能しにくいのではないかという疑問が生じるわけである。これに対しては、その名が一旦固有名としてその地域の人に受け入れられたならば（認められたならば）、固有名としての純粋さに関わりなく固有名として通用するというのが答ではなかろうか。ペンギンが、鳥性が劣っていても鳥として通用するのと同じであろう。Gも、Dartmouthという固有名は、その町がダート河の河口にあってもちゃんとした固有名である、というのはそれがその町の名称として受け入れられており、その町を identify するための正しい言語上の道具だとみんな知っているからだ（41頁）と述べている。

固有名（詞）は、構造言語学、生成文法などであまり議論されることはなかった。認知言語学でも同じである。Gをはじめ、固有名を扱ったミル、フンケ、マルティ、ラッセル、イエスペルセン等の著作をいまの若い人が読むことはあまりないと思われる。この小論がそういった人達の何かの参考になれば望外の喜びである。